

中原遺跡 第2次調査

—— 分譲住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

2005

埼玉県狭山市遺跡調査会

なかはら いせき

中原遺跡 第2次調査

—— 分譲住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

2005

埼玉県狭山市遺跡調査会

序

狭山市域の遺跡は中央を貫流する入間川の左右両岸に、川に沿う形で所在します。いずれも当時の人々の生活を知る上で、たいへん貴重なものです。しかし、昭和40年代後半より増加した諸々の開発行為によりこれらの遺跡は破壊の危機にさらされることとなります。狭山市はそれら開発行為によって形としては滅失してしまう埋蔵文化財を事前に発掘調査し、記録・保存を行っています。

この報告書もその記録保存事業の一つの成果を表したものです。

本報告書は平成16年度に実施した調査で、分譲住宅建設に伴って行われたものです。主に奈良・平安時代の住居遺構等が発見され、隣接する同時代の遺跡群と共に、同時代の人々のくらしの一端を明らかにする資料が出土しています。

この成果が当地域の研究と埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、市民の皆様の生涯学習に資するものになれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査においてご理解いただいた株式会社ハウスネット様、献身的に調査に従事し、報告書刊行までご協力いただいた協力員の方々に厚く御礼申し上げます。

平成17年7月

狭山市遺跡調査会
会長 門倉 節明

例 言

1. 本書は狭山市狭山地内所在の中原遺跡第2次調査の報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は分譲住宅建設に伴うもので、狭山市遺跡調査会が発掘調査を実施し、調査費用は株式会社ハウスネットが負った。
3. 発掘調査届に対する文化庁の受理番号と調査原因は、以下のとおりである。
平成17年1月31日付、教文第5-180号 分譲住宅建設
4. 発掘調査期間は、整理・報告書作成期間は、以下のとおりである。
発掘調査：平成16年7月20日～平成16年8月6日
整理・報告書作成：平成16年8月9日～平成17年6月15日
5. 発掘調査は安井智幸が担当した。また、遠藤義昌、岸 純一、岸千代子、橋本弓子が参加した。
6. 図版の作成と出土品の整理は安井智幸が担当した。また、石塚 香、今坂優代、岸千代子、瀬戸山真由美、橋本弓子の補助を受けた。
7. 本書の執筆は安井があたった。
8. 本書の編集は狭山市遺跡調査会が行った。
9. 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸氏並びに諸機関から御教示・御協力を賜った。厚く感謝の意を表する（敬称略、五十音順）。
赤熊浩一 田中広明 富田和夫 中平 薫 柳井章宏 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
埼玉県教育委員会生涯学習部文化財保護課 三芳町歴史民俗資料館

凡 例

1. 挿図の縮尺は以下のとおりである。また、各挿図にスケールを付した。
遺構図：1/60、調査区全測図：1/100、遺物実測図：1/3、1/6
2. 遺構平面図の方位は座標北を、遺構断面図の水糸レベルは、海拔高を示す。
3. 遺構の表記記号は以下のとおりである。
住居跡：S J、土壇：S K
4. 遺物観察表の表記は口径、器高、底径はcmを単位とし、()内の数値は推定値・現存値である。色調は部分省略し、青灰・灰白・褐灰・褐・明褐、他とした。胎土は肉眼で観察できるものを示し、焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。残存率は図示した器形に対し、5%単位で示したが、20%以下で特徴を示し難いものは「破片」として処理した。
5. 本報告書に掲載した出土品は狭山市教育委員会で保管している。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
図版目次	

調査の概要	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査の組織	1
3 発掘調査の経過	2
遺跡の立地と環境	3
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
3 遺跡の概要	7
遺構と遺物	9
1 調査成果の概要	9
2 検出遺構と出土遺物	9
住居跡	9
土壌	13
表採遺物	18
まとめ	18

挿図目次

第1図 狭山市遺跡分布図	4	第7図 第2号住居跡・	
第2図 中原遺跡第2次調査位置図	7	第4・5・6号土壌(2)	13
第3図 中原遺跡第2次調査全測図	8	第8図 第2号住居跡出土遺物(1)	14
第4図 第1号住居跡	9	第9図 第2号住居跡出土遺物(2)	15
第5図 第1号住居跡出土遺物	10	第10図 第4号土壌出土遺物	16
第6図 第2号住居跡・		第11図 第5号土壌出土遺物・表採遺物	17
第4・5・6号土壌(1)	12	第12図 中原遺跡第2次調査編年表	19

図版目次

図版1 中原遺跡第2次調査区全景	図版3 第1号住居跡出土遺物
中原遺跡第2次調査風景	第2号住居跡出土遺物
図版2 第1号住居跡全景	図版4 第2号住居跡出土遺物
第1号住居跡カマド1	図版5 第4号土壌出土遺物
第1号住居跡カマド2	第5号土壌出土遺物
第1号住居跡カマド3	
第2号住居跡全景	
第2号住居跡カマド	
第4号土壌	
第5・6号土壌	

調査の概要

1 発掘調査に至る経過

平成 16 年 4 月 5 日に株式会社ハウスネットより狭山市狭山 663 外の土地における埋蔵文化財の所在について照会があり、それに対して埋蔵文化財包蔵地台帳により中原遺跡に該当する旨を回答した。その後、埋蔵文化財の確認調査の依頼を受けて、平成 16 年 4 月 16 日から平成 16 年 4 月 23 日にかけて確認調査を実施した結果、竪穴住居跡 3 軒が検出された。この結果について、平成 16 年 4 月 23 日付けで依頼者株式会社ハウスネットに報告するとともに、協議を開始。その結果、道路部分にかかる 200 m²について、埋蔵文化財発掘調査の実施を指示した。依頼者は 8 月末には工事を開始したいとの意向で、対応が急がれるところであったので、狭山市遺跡調査会が主体となって、平成 16 年 7 月 20 日に発掘調査を開始した。

本調査の文化財保護法第 57 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘調査届に係る埼玉県教育委員会教育長の指示通知は例言に示したとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	開 発 者	調 査 面 積	時 代
中原遺跡 (県遺跡番号 22 - 025)	狭山市狭山 663 外	株式会社 ハウスネット	200 m ²	縄文・奈良・平安

2 発掘調査の組織

1) 発掘調査 (平成 16 年度)

主体者	狭山市遺跡調査会	会長	門倉節明	(狭山市教育委員会教育長)
		理事	今坂隆二	(狭山市文化財保護審議会委員長)
		理事	岸 一身	(狭山市教育委員会教育部長)
事務局	狭山市遺跡調査会	事務局長	仲川和光	(生涯学習課長)
		事務局次長	末吉 隆	(生涯学習課主幹)
		事務局	石塚和則	(生涯学習課主任)
		事務局	田口 勉	(生涯学習課主事)
		事務局	安井智幸	(生涯学習課主事)
調査担当			安井智幸	(生涯学習課主事)

2) 報告書作成 (平成 17 年度)

主体者	狭山市遺跡調査会	会長	門倉節明	(狭山市教育委員会教育長)
		理事	今坂隆二	(狭山市文化財保護審議会委員長)
		理事	中内丈夫	(狭山市文化財保護審議会副委員長)
		理事	池原昭治	(狭山市文化財保護審議会委員)
		理事	岸 一身	(狭山市教育委員会生涯学習部長)
事務局	狭山市遺跡調査会	事務局長	仲川和光	(社会教育課長)
		事務局次長	末吉 隆	(社会教育課主幹)

	事務局	石塚和則	(社会教育課主任)
	事務局	田口 勉	(社会教育課主事)
	事務局	安井智幸	(社会教育課主事)
整理担当		安井智幸	(社会教育課主事)

3 発掘調査の経過

発掘調査は、狭山市教育委員会が平成 16 年 4 月 16 日から平成 16 年 4 月 23 日にかけて行った埋蔵文化財確認調査の結果を受け、工事予定面積 4,671 m²のうち、道路用地において遺構が確認された 200 m²を対象として実施した。調査の経過は、以下のとおりである。

平成 16 年度

7 月 20 日(火)

機材搬入。作業開始。人力による遺構確認作業。竪穴住居跡 2 軒、土壇 3 基を確認。

7 月 21 日(水)

遺構確認終了。調査区第 1・2 号住居跡、第 4・5・6 号土壇調査開始。

7 月 30 日(金)

第 1 号住居跡の個別写真撮影。撮影終了後、実測準備。

8 月 2 日(月)

第 1 号住居跡実測開始。第 2 号住居跡、第 4・5・6 号土壇調査続行。

8 月 4 日(水)

第 2 号住居跡・第 4・5・6 号土壇の個別写真撮影。撮影終了後、実測開始。

8 月 5 日(木)

第 1 号住居跡実測終了。調査区の実測開始。

8 月 6 日(火)

第 2 号住居跡・第 4・5・6 号土壇・調査区の実測終了。機材撤収。現地調査終了。

遺跡の立地と環境

1 地理的環境

狭山市の中央には、外秩父山地の伊豆ヶ岳・武川岳等を水源とする名栗川と青梅市に水源を持つ成木川とが加治丘陵で合流した入間川が流れており、北側となる左岸は二段、南側となる右岸は三段の河岸段丘を形成している。奈良・平安時代の市内遺跡はこの入間川を中心にして分布するものが多い。

入間川左岸は武蔵野台地の一部である入間台地に属し、北から宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、御所の内遺跡、小山ノ上遺跡、鳥ノ上遺跡、富士塚遺跡、森ノ上遺跡と存在し、若干離れて今宿遺跡、上広瀬遺跡、金井上遺跡、宮地遺跡、東八木窯跡群等が連綿と帯状に続く。これら一連の遺跡群は時代が下るにつれて下流から上流へと形成されていく傾向があるが、主な理由として上流にあたる入間市の東金子窯跡群の成立が挙げられる。

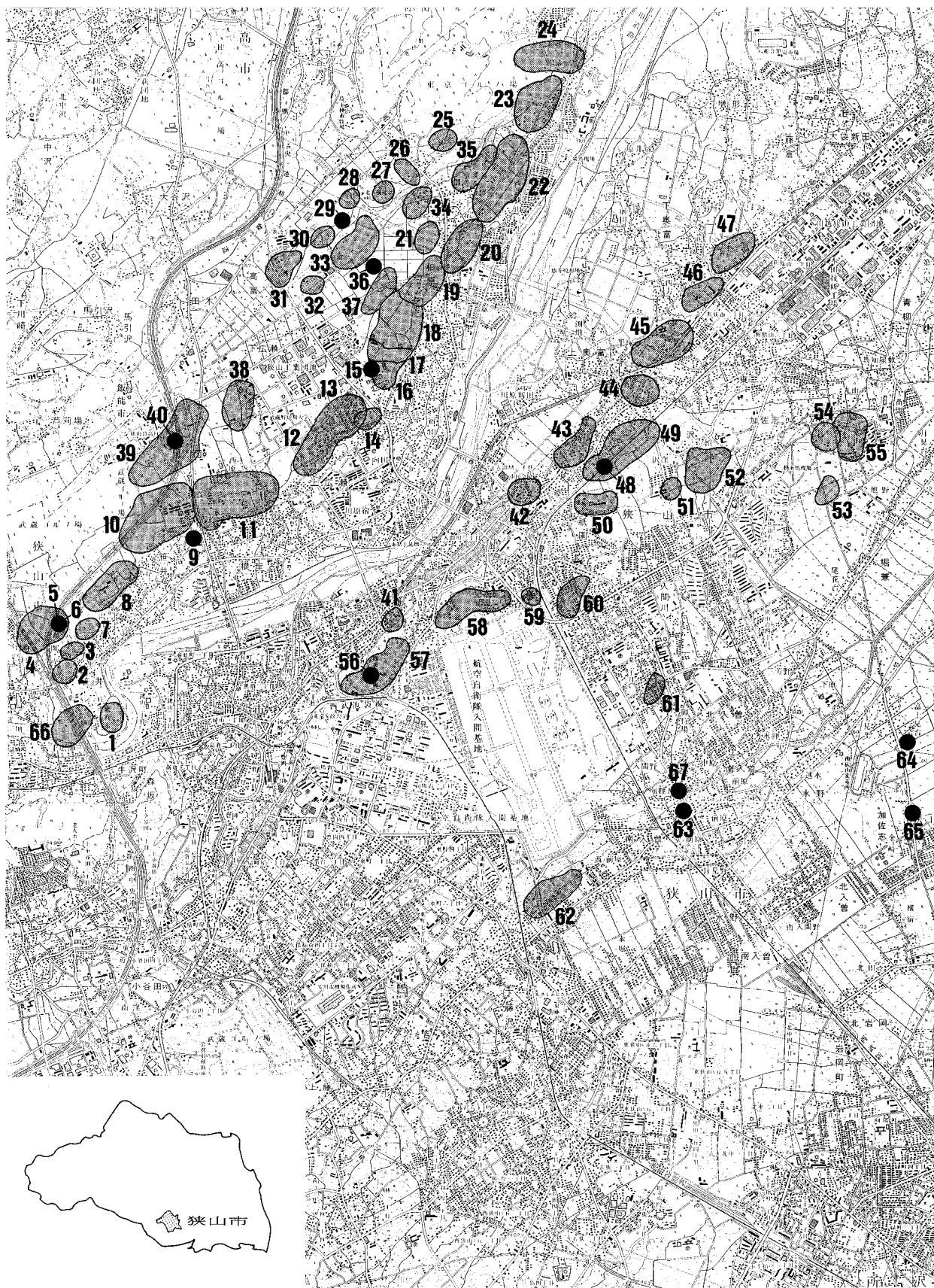
入間川右岸は武蔵野台地に属する旧多摩川の隆起扇状地で、北から稻荷上遺跡、揚櫃木遺跡、坂上遺跡、戸張遺跡、中原遺跡、峰遺跡、滝祇園遺跡等が左岸の遺跡群に対峙する形で集落を形成する。これら右岸の遺跡群は地下水脈が深く、飲料水の確保が困難であるにも関わらず形成されていることから、入間川の水運の利用が目的であったと考えられる。また、鉄製農具や下総系統の土師器が出土していること、8世紀後半に集中して集落が発展していること等から、移住民も利用した大規模な開墾事業に関連する集落跡であることも考えられる。

2 歴史的環境

先土器時代の遺跡としては、平成2年度から平成3年度にかけて（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した西久保遺跡発掘調査において、先土器時代の石器製作跡が多数発見され、当市における該期の一端が明らかとなった。狭山市遺跡調査会でも、平成6年度に同遺跡の発掘調査を行っている。武蔵野台地第4層下部の良好な資料を得た。また、宮地遺跡では細石刃、細石核が表採されている（城近他 1972）。

縄文時代の遺跡は、大略草創期から後期後半までが確認されている。概観すると、前期黒浜期に集落の明確化、遺跡数の増加等、大きな動きが認められるが、数的には中期中葉から後葉のものが大勢を占めており、この時期偏差が市内の縄文遺跡を特徴づけている。過去の調査事例もこの時期に集中する。ここでは、近年検出された遺構に関連する中期終末から後期初頭について概述することとする。

市内遺跡は、表面採集資料による時期決定も含めてであるが、縄文時代中期には遺跡数が39箇所と急増し市内遺跡全体の60%を超え、遺跡数の増加、集落規模の拡大が顕著となる。しかしながら、中期終末から後期初頭では、周辺地域にも認められるように集落規模は急速に縮小する。入間川左岸においては、森ノ上遺跡（16）の他、宮地遺跡（8）、字尻遺跡（24）、右岸では揚櫃木遺跡（45）等、中期末から後期初頭の柄鏡形住居跡が数軒単位で検出されており、市内各地で集落の縮小、住居軒数の急激な減少が確認されている。柄鏡形住居跡は、周辺の入間市、飯能市、日高市でも多くの検出例があり、県内でも入間地方は本種遺構の分布密度が濃いことで知られている。ただし、森ノ上遺跡や字尻遺跡のように該期のみに限定された集落は稀有な存在と言えよう。なお、入間川左岸に立地する今宿遺跡（13）では、中期末の張出部を持たない径3m前後の小型住居跡が確認されている。本種住居跡は、日高市宿東遺跡でも検出例が



第1图 狭山市遺跡分布图

狭山市内遺跡一覧（括弧内は県遺跡番号）

- 1 東八木窯跡群（22049）奈・平
- 2 八木遺跡（22068）縄（前・中）奈・平
- 3 八木北遺跡（22021）奈・平
- 4 八木上遺跡（22022）縄（前・中）奈・平
- 5 沢口上古墳群（22020）古（後）
- 6 笹井古墳群（22019）古（後）
- 7 沢口遺跡（22080）縄（早～中）古、奈・平
- 8 宮地遺跡（22018）縄（中）奈・平
- 9 金井遺跡（22071）中
- 10 金井上遺跡（22023）縄（草・前）奈・平、中
- 11 上広瀬上ノ原遺跡（22005）縄（草）奈・平
- 12 霞ヶ丘遺跡（22004）縄（中）奈・平
- 13 今宿遺跡（22002）縄（早～中）奈・平
- 14 上広瀬古墳群（22001）古（後）
- 15 森ノ上西遺跡（22079）先
- 16 森ノ上遺跡（22008）縄（中）奈・平
- 17 富士塚遺跡（22009）縄（中）奈・平
- 18 鳥ノ上遺跡（22010）奈・平
- 19 小山ノ上遺跡（22011）縄（中・後）古～中
- 20 御所の内遺跡（22012）奈・平
- 21 英遺跡（22074）奈・平、中
- 22 城ノ越遺跡（22013）縄（前・中）奈・平、中
- 23 宮ノ越遺跡（22016）縄（前・中）奈・平
- 24 字尻遺跡（22075）縄（前～後）奈・平
- 25 丸山遺跡（22037）縄（早・前～後）奈・平
- 26 金井林遺跡（22035）縄（前～後）
- 27 鶴田遺跡（22044）縄（前・中）
- 28 上ノ原東遺跡（22065）奈・平
- 29 上ノ原西遺跡（22063）縄（中）
- 30 半貫山遺跡（22061）中
- 31 稻荷山遺跡（22058）縄（後）
- 32 前山遺跡（22059）縄（中）
- 33 高根遺跡（22062）縄（早・中・後）
- 34 町久保遺跡（22034）縄（中）奈・平、中
- 35 宮原遺跡（22017）縄（前～後）
- 36 下双木遺跡（22078）縄（草）
- 37 上双木遺跡（22077）縄（中・後）奈・平
- 38 上広瀬西久保遺跡（22073）奈・平
- 39 西久保遺跡（22069）先、縄（草）奈・平
- 40 東久保遺跡（22070）先
- 41 上諏訪遺跡（22086）縄（中・後）
- 42 滝祇園遺跡（22066）縄（草～後）古、奈・平
- 43 峰遺跡（22024）縄（中・後）奈・平
- 44 戸張遺跡（22026）縄（前・中）奈・平
- 45 楊樞木遺跡（22027）縄（前・中）奈・平
- 46 坂上遺跡（22029）縄（中）奈・平
- 47 稻荷上遺跡（22032）縄（前・中）奈・平
- 48 上中原遺跡（22025）先
- 49 **中原遺跡（22025）縄（早～後）奈・平**
- 50 沢台遺跡（22079）縄（中）奈・平
- 51 沢久保遺跡（22041）縄（中）
- 52 下向沢遺跡（22042）縄（中・後）奈・平
- 53 吉原遺跡（22067）縄（前）
- 54 下向遺跡（22085）縄（前～後）
- 55 台遺跡（22084）縄（前～後）
- 56 稻荷山公園古墳群（22052）古（後）
- 57 稻荷山公園遺跡（22051）縄（中）
- 58 石無坂遺跡（22083）縄（中）奈・平
- 59 富士見西遺跡（22082）縄（中）奈・平
- 60 富士見北遺跡（22072）縄（前・中）奈・平
- 61 富士見南遺跡（22081）縄（中）
- 62 町屋道遺跡（22088）縄（前～後）奈・平
- 63 七曲井（22046）中
- 64 堀兼之井（22047）中
- 65 八軒家の井（22076）中
- 66 八木前遺跡（22087）縄（前・後）
- 67 堀難井遺跡（22089）中

あり、系統や柄鏡形住居跡との共存関係等、興味深い問題が提起されている。

縄文時代晩期から弥生時代にかけては、当市では確認例が非常に少なく、森ノ上遺跡で土壌中より弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる搬入土器が一点報告されているのみである（安井 2005）。

古墳時代の遺跡として当市には沢口上古墳群（5）、笹井古墳群（6）、上広瀬古墳群（14）、稻荷山公園古墳群（56）と滝祇園遺跡（42）が存在する。現在まで調査が実施されたのは笹井古墳群、上広瀬古墳群で、7世紀後半のものと考えられる。笹井古墳群は石室の構造が特異なため、奈良時代以降の墳墓の可能性も否定できない。当該期の集落遺跡としては滝祇園の竪穴住居が挙げられる（小淵他 1983）。

奈良・平安時代の集落は入間川左岸に帯状に23遺跡、右岸は久保・不老川流域を含めて14遺跡存在する。これら市内の集落形成の契機となったのは高麗郡の建郡と考えられる。高麗郡は渡来人の高度な技術で未開発地域の開墾を進めようとする中央政府の意図によって東海道・東山道に分散していた渡来人が集められ、霊龜2年（716年）に設置された郡である。

当地方に高麗郡に移住してきた渡来人たちがもたらした技術は主に窯業技術と鉄製品生産技術と考えられており、窯業については東八木窯跡（1）を含む東金子窯跡群の操業開始が、鉄製品生産技術に関しては羽口や鉄滓の出土状況から推定される小鍛冶の開始と在地産鉄製品の普及がその例として挙げられる。

8世紀中頃に東金子窯跡群での須恵器生産が開始され、入間川両岸での居住もほぼ同時期に開始されたと考えられる。当該期の遺跡として宮ノ越遺跡（23）、森ノ上遺跡（16）、小山ノ上遺跡（19）、楊櫨木遺跡等が挙げられ、東金子古段階の前内出窯古式とそれに並行する南比企の須恵器が出土している。

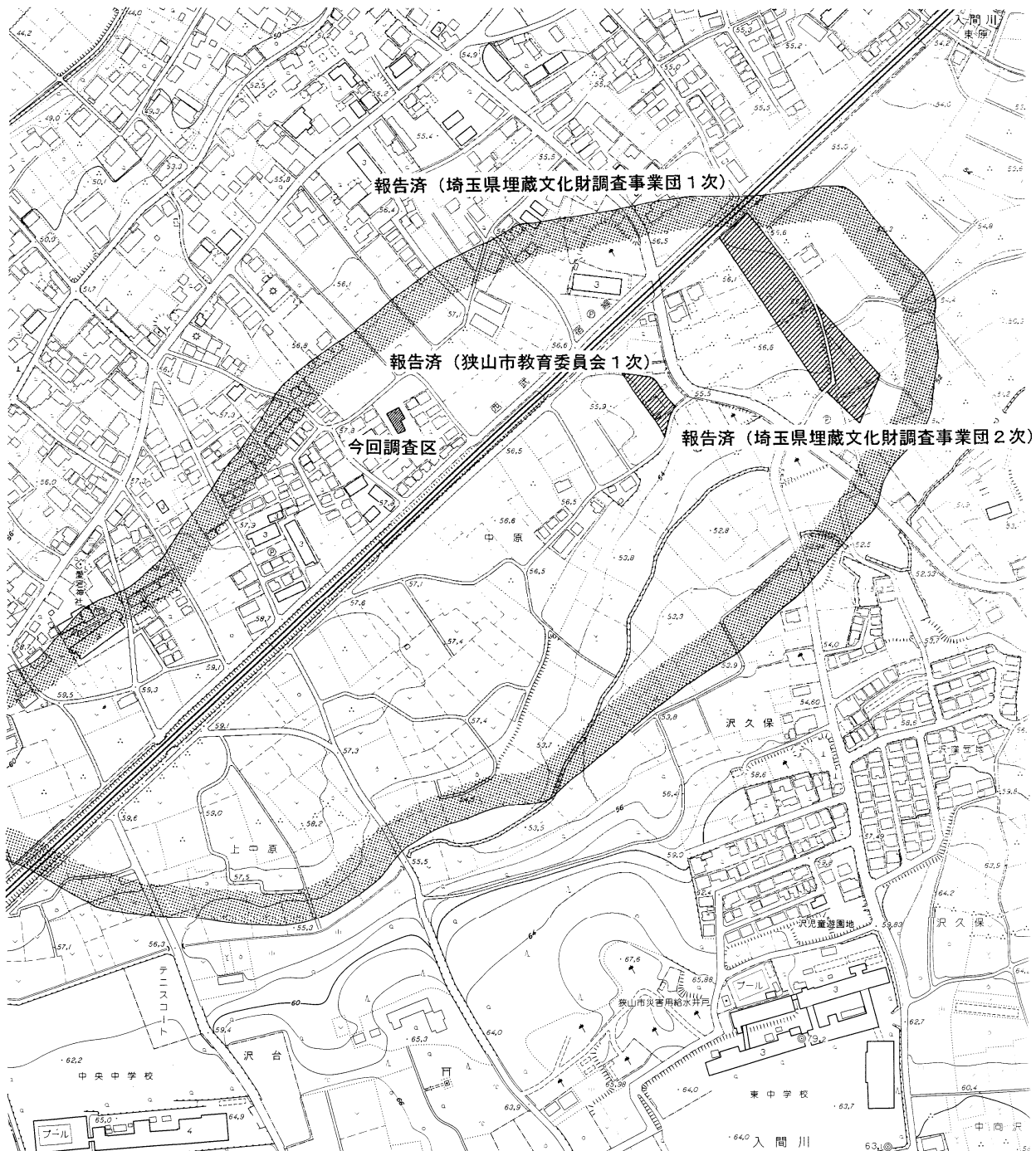
若干時代が下る8世紀後半から9世紀初頭には前内出窯新式の須恵器が普及し、入間川左岸の宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡（22）、上広瀬上ノ原遺跡（11）、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、宮地遺跡では東金子産の須恵器の割合が南比企産を圧倒的に上回る。窯に近くなるほどこの東金子産の割合が大きくなるのだが、右岸の楊櫨木遺跡では東金子窯跡群に近いにもかかわらず南比企産の須恵器が出土量遺物の1/3を占める。

9世紀中頃には二つの現象が特徴とされる。一つ目は人口増加で、これは住居跡数から確認できる。入間川左岸では宮ノ越遺跡から城ノ越遺跡、御所の内遺跡（20）、小山ノ上遺跡、上広瀬上ノ原遺跡、霞ヶ丘遺跡（12）、森ノ上遺跡、今宿遺跡、金井上遺跡（10）、宮地遺跡へと連綿と集落が形成されているが、当該期とされる住居跡が圧倒的に多い。右岸でも稻荷上遺跡（47）、楊櫨木遺跡、峰遺跡（43）、戸張遺跡（44）、滝祇園遺跡、中原遺跡（49）と、左岸ほどではないがやはり帯状に集落が形成されている。二つ目は東金子窯製品が入間川流域一帯の集落に広く供給されるようになったことで、これは出土遺物から確認できる。楊櫨木遺跡でも東金子産須恵器が左岸の遺跡と同等の割合を占めるようになる。これら二つの現象の契機として挙げられるのが承和12年（845年）に開始された国分寺の再建である。八坂前・新久A-1・2窯（入間市）で瓦焼成が行われたことによる大規模な人資の流入が直接的な要因と考えられる。

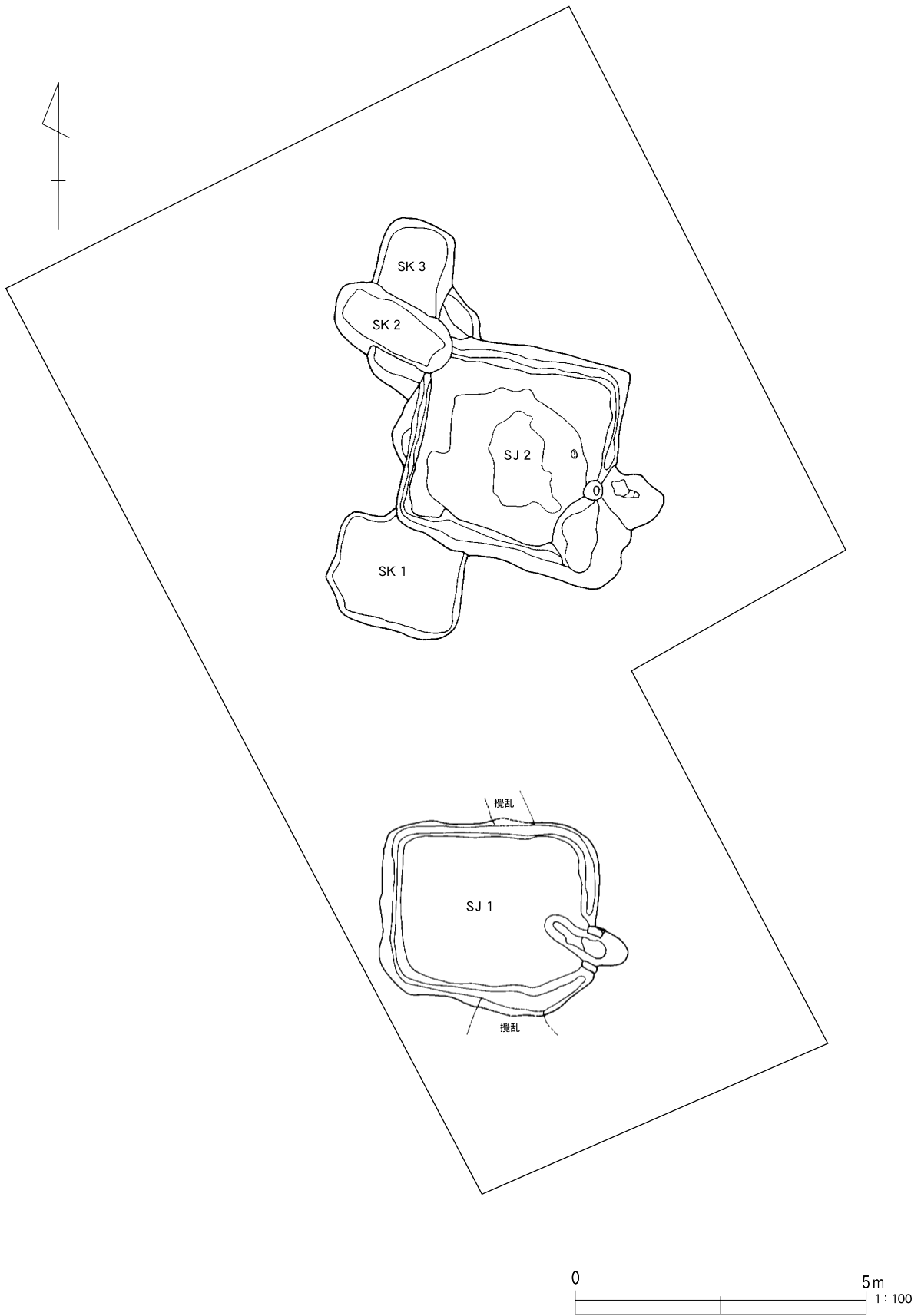
9世紀後半になると住居数は次第に減少し、入間川両岸における住居数や密度の差異はほとんど見られなくなる。当該期の遺跡である宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、小山ノ上遺跡、今宿遺跡、稻荷上遺跡、楊櫨木遺跡、戸張遺跡、中原遺跡からは新久A-1・2窯からD-1・3窯の須恵器が出土するが約半数は還元焰焼成が上手く行われていない。土師質須恵器の坏や埴も出現し始めることから須恵器生産の諸環境が悪化し、衰退していることがわかる。須恵器生産の衰退の原因は、やはり国分寺再建事業の終了が大きな原因であると考えられる。瓦焼成終了後も須恵器は生産されているが生産規模は縮小されており、操業を終えたと共に人口も減少していったものと考えられる。

3 遺跡の概要

中原遺跡は、狭山市狭山に所在する縄文時代早期から後期および奈良・平安時代の集落遺跡で、西武新宿線狭山市駅より北東へ、直線距離にして1.5 km付近に位置する。遺跡のほぼ中央、南西から北東にかけて西武新宿線が走る。本遺跡は入間川東小学校付近に水源を持つ久保川に開析された河岸丘の左岸で、鉄道の東側は野菜畑や麦畑の田園風景が広がり、西側は徐々に開発が進み家屋が点在している。分布調査から推定される遺跡範囲は880 × 370mで、遺跡内の標高は北側が52m、南側が58mで、遺跡面は若干南に傾斜している。



第2図 中原遺跡第2次調査区位置図



第3図 中原遺跡第2次調査区全測図

遺構と遺物

1 調査成果の概要

調査の結果、検出された遺構は竪穴住居跡 2 軒、土壇 3 基である。検出された遺物は 8 世紀第 3 四半期から 9 世紀第 4 四半期までの須恵坏・埴・高台付埴・蓋・皿・鉄鉢・長頸瓶、土師甕・台付甕、鉄製環である。また、灰釉陶器皿片と見られるものも出土したが、産地の特定は出来るほどの破片ではなかった。

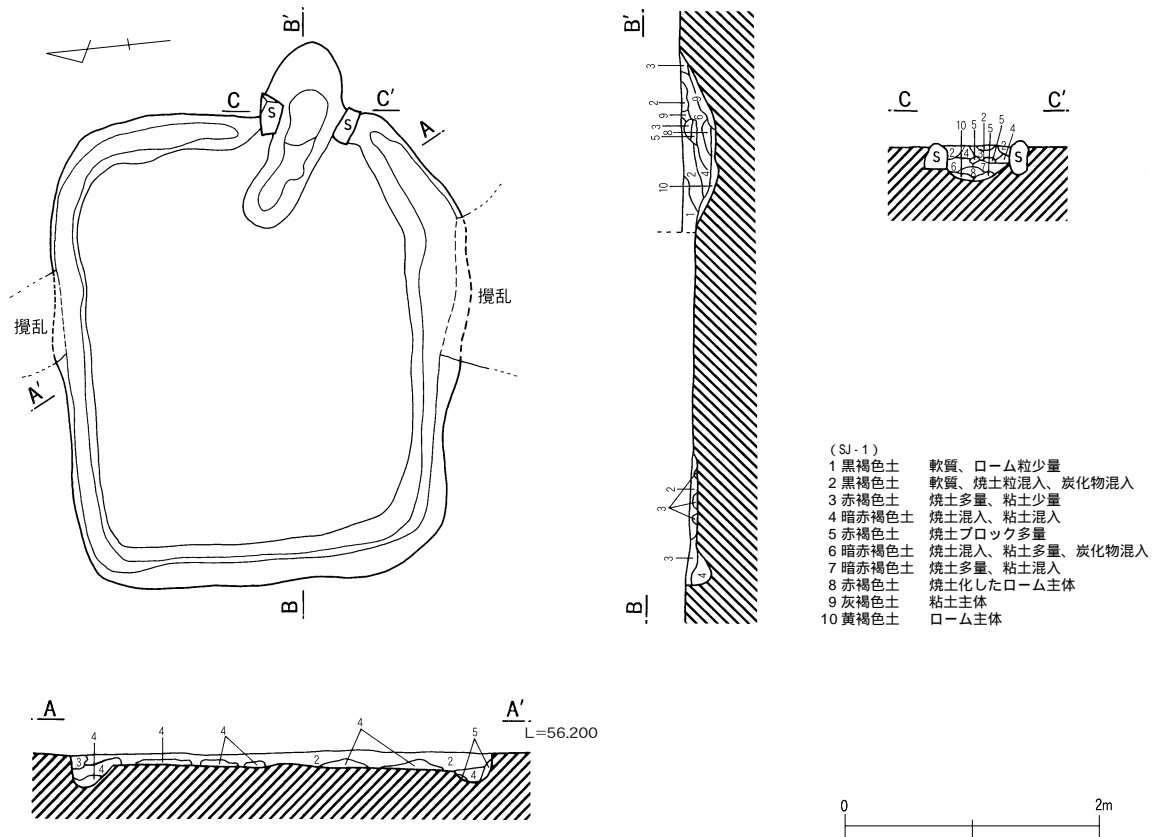
2 検出遺構と出土遺物

住居跡

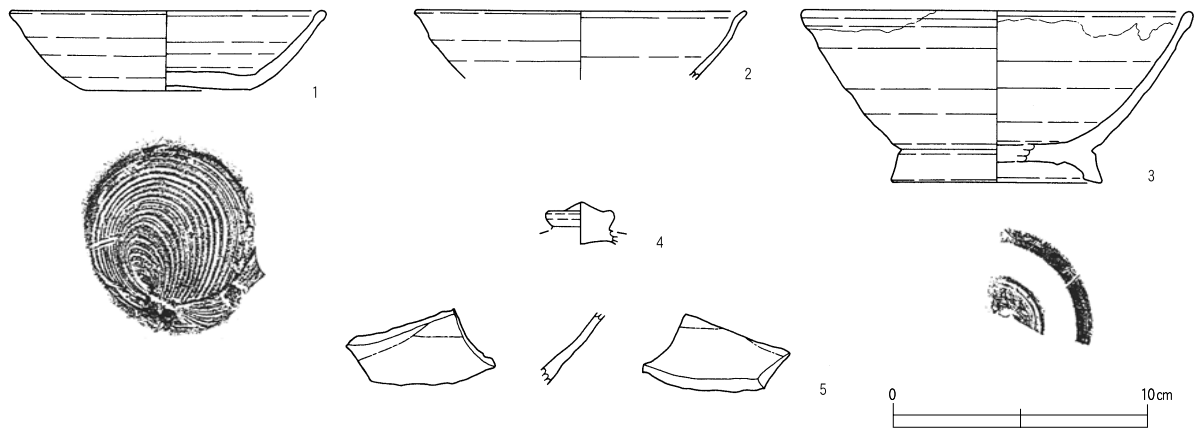
第 1 号住居跡（第 4・5 図）

調査区南側に位置する。西側覆土は失われているが、床面およびカマドの遺存状態は良好。平面形はわずかに南北に長い長方形を呈し、全体の規模は長軸長 4.24m、短軸長 3.15m、深さ 0.12m を測る。主軸方位は N - 97° - E を指す。

掘りこみは浅いが硬質で平坦な床面。覆土は大略 10 層に分けられる。カマド以外の覆土にも焼土が散



第 4 図 第 1 号住居跡



第5図 第1号住居跡出土遺物

第1号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵坏	(12.3)	6.5	3.1	35%	白色粒・石英	良好	灰色	回転糸切り。東金子産
2	須恵坏	(13.0)	-	2.7	15%	石英・細砂	普通	乳白色	砂質でもろい。東金子産?
3	須恵高台碗	(15.2)	8.2	6.8	25%	石英・細砂	普通	灰色	回転糸切り。東金子産
4	須恵蓋	-	-	1.7	5%	白色粒	普通	黄灰色	ツマミ径 2.7 cm。東金子産
5	灰釉陶器皿?	-	-	2.9	5%	石英・細砂	不良	黄褐色	表裏に灰釉(ハケ塗り)。東美濃産?

見できることが特徴。

カマドは東カマドで遺存状態は良好。補強材と考えられる石もカマド両袖から検出された。平面形は釣鐘形を呈し、規模は長軸長 151 cm、両袖間 78 cm、深さ 28 cmを測る。6 から 10 層がカマドのもので、そのうち 6・9 層は主要構築材の粘土が溶けたものと見られる。炭化物検出量の少なさが特徴的。

ピットは検出されず、全体を巡る浅い壁溝のみ検出された。

出土した遺物は須恵坏・高台付碗・蓋、灰釉陶器皿と思われるものの 5 点である。1 は東金子産の須恵坏で、住居南東部から出土した。体部下位にまで及ぶ糸切り痕が特徴。内底面がツルツルで、転用硯の可能性もある。2 は産地不明の須恵坏でカマドから出土した。胎土が砂質で乳白色を呈するのが特徴。埼玉県内でも時々確認されるもろい須恵器である。3 は東金子産の須恵高台付碗で、高台外側の沈線が特徴的。口縁部に付着物があるが、おそらく油煙であると考えられる。4 は須恵蓋でツマミ部分のみ出土した。出土位置は 1 と同じ住居南東部。胎土から、おそらく東金子産のものと推定した。5 は灰釉陶器皿の可能性のあるもので、白色の釉葉状のものが漬け掛けによって塗布されている。住居北西部の覆土より出土した。

第2号住居跡(第6・7・8・9図)

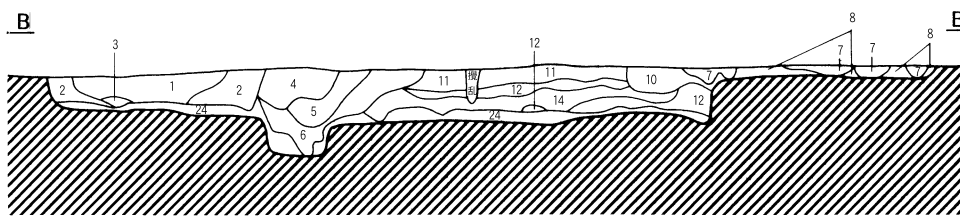
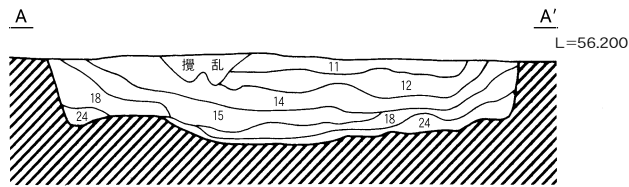
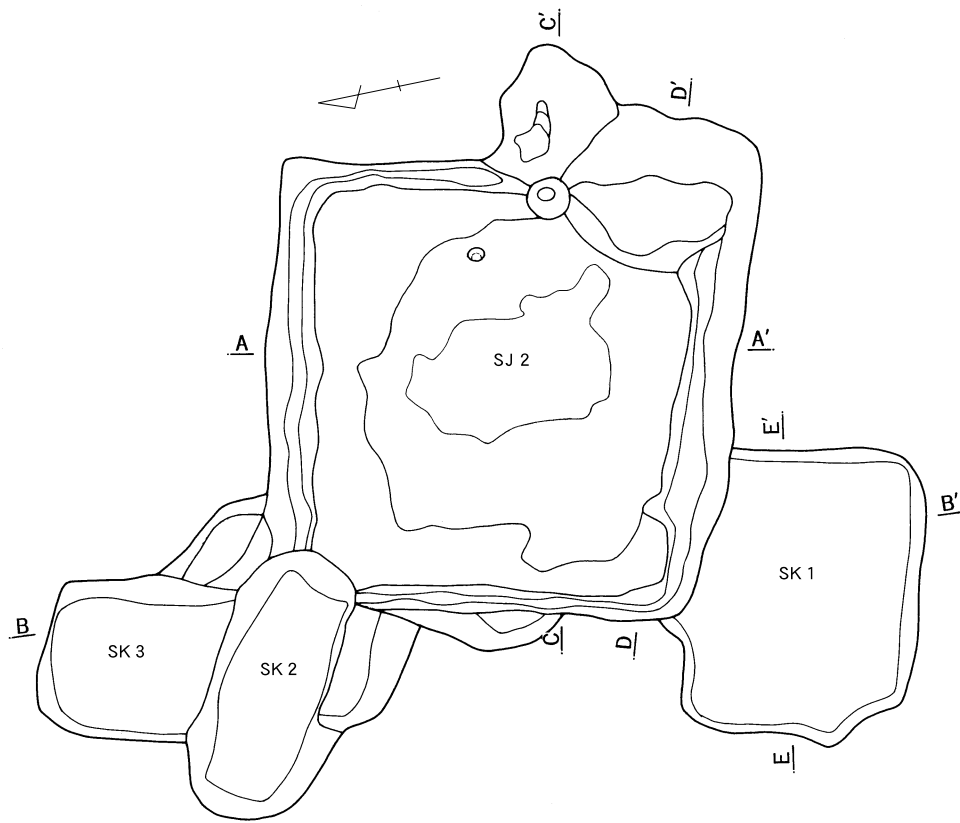
調査区北側に位置する。第4・5・6号土壌と重複し、本住居跡はこのうち最も古い。遺存状態は良好。平面形は南東コーナーがやや崩れた形になるが、ほぼ正方形に近い形を呈する。全体の規模は長軸長 4.50m、短軸長 3.71m、深さ 0.74mを測る。主軸方位は N - 101° - E を指す。

床面は中央が深く掘り込まれ、緩く中央に向けて傾斜している。全体的に掘り込みが深く、しっかりと壁体が検出された。土層は重複する土層も含めて 24 層に分けられ、本住居跡の層は 11 から 23 層と 24 層の一部である。

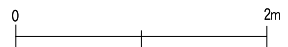
カマドは東カマドで遺存状態は良好。カマド焚口から灰を掻き出した痕と見られる円形の掘り込みが検出された。平面形は不整形な菱形を呈し、全体の規模は長軸長 138cm、両袖間 87cm、深さ 74cm を測る。16 から 23 層がカマドに由来するもので、その内 16・17・23 層は主要構築材の粘土の溶けたものと考えられる。

ピットは検出されなかった。カマド右には棚状遺構であった可能性のある傾斜部分があり、壁溝はその部分を除いて巡る。壁溝自体の掘り込みは浅い。

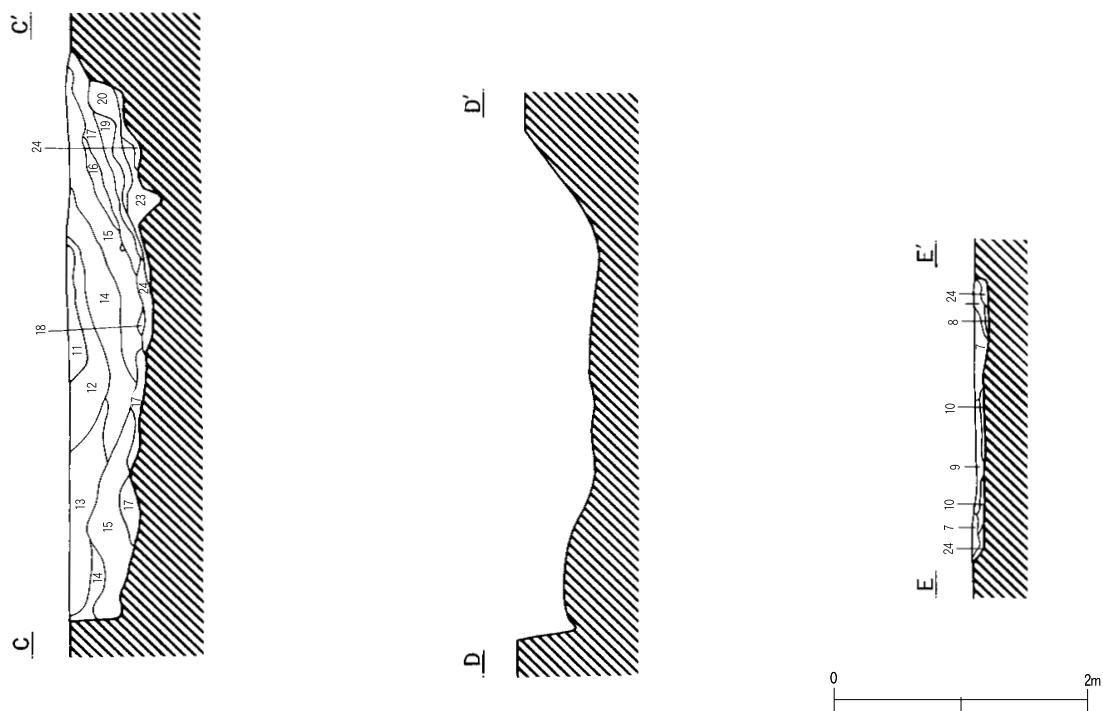
遺物は須恵坏・高台付壠・壠・鉄鉢、土師台付甕・甕、鉄製環が出土している。1 は東金子産の須恵坏で、胎土が良く締まり、重量感がある。角を持って屈曲する内底部から体部への接続点と、外底径より大きい内底径、周辺手持ちヘラ削りが施された底部が特徴。住居南西部から出土した。2 は須恵坏底部片で、おそらく「x」の一部であろうと考えられるヘラ記号があるのが特徴。周辺手持ちヘラ削りが施された南比企産の須恵坏。3 は住居北東部から出土した須恵坏で、東金子産のもの。割れて廃棄された後、外面底部に黒色のタール状のものが付着した痕がある。4 は住居中央の床直上から出土した須恵坏片で、内面に円形に煤が付着している。5 は住居中央の覆土より出土した南比企産の須恵坏で、底中央部が薄く作られている。器面は灰色だが、断面は赤黒く、鉄錆色。6 はカマドから出土した東金子産須恵坏で、内底部に爪先技法が使われている。7 はカマドから出土した東金子産の須恵坏で、全体的に均一な器厚と砂質でザラザラな質感が特徴的。本住居出土の 13 と同一個体の可能性もある。8 はカマドから出土した、焼成不良の東金子産須恵坏。底部は非常に厚く、調整が雑である。9 は東金子産の須恵坏。8 と同じで底部が厚いが、良質な胎土が使用され、焼成も良好である点が相違する。口縁部の内外に、わずかではあるが指圧痕がある。10 はカマドと住居南東部から出土した東金子産の須恵坏。直線的に立ち上がる体部と、細かいロクロ目が特徴。11 は住居南東部から棚状遺構付近から出土した東金子産須恵坏で、直線的に立ち上がる体部をもち、口縁部外面には指圧痕の沈線がわずかに確認できる。焼成は良好で暗灰色を呈する。12 は全体的に厚手に作られた、砂質の東金子産須恵坏。口縁部は若干「S」字状に屈曲する。カマドより出土。13 は前述した 7 と同一個体の可能性のある東金子産須恵坏。7 と比べると口縁部のツマミ痕が若干強い感があるのと、接合点が無かったため、別個体として掲載した。14 は肝心の底部は出土しなかったが、立ち上がる体部と口縁体部内面の面取り等の調整の具合から、高台付壠とした。体部はふくらみをもち、ロクロ目が細かいことが特徴。住居北西部より出土した。15 は口縁端部が若干外反する、東金子産の須恵坏である。周辺手持ちヘラ削りが施されており、底中央部が極端に薄い。カマド付近から出土した。16 は住居北西部より出土した小型の東金子産須恵蓋である。扁平な擬宝珠型のツマミをもち、回転ヘラ削りは天井部の約 60% に及ぶ。17 も東金子産須恵蓋で、中型のものである。口縁端部はほぼ直角に屈曲する。天井部の 70% 程度に及ぶ回転ヘラ削りが特徴的。18 は住居西部より出土した東金子産須恵鉄鉢である。口縁端部はやや厚手で、端部の立ち上がりが 2 mm 程度に及ぶのが特徴。肩部には降灰を受けている。19 は土師台付甕で、カマドに近い住居北東部より出土した。「コ」の字状の下部が崩れた形の口縁部で、口縁端部はあまり開かない。頸部の横ナデ後に胸部のヘラ削りが施されている。横ナデの際に出来たと見られる粘土シワが数箇所確認できる。20 はカマドより出土した土師甕で、口縁部は 19 と同じ「コ」の字



- (SJ-2)
- | | | | |
|----------|--------------|----------|--------------------|
| 1 黒褐色土 | 焼土粒少量 | 13 黒褐色土 | ローム粒少量、ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒少量 | 14 暗茶褐色土 | ローム粒少量、ロームブロック混入 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒混入、焼土粒少量 | 15 黒褐色土 | ローム粒少量、ロームブロック混入 |
| 4 暗茶褐色土 | ローム粒混入、焼土粒少量 | 16 暗褐色土 | ローム粒少量、炭化物・焼土・粘土混入 |
| 5 暗茶褐色土 | ローム粒少量 | 17 暗灰褐色土 | ローム粒少量、焼土少量、粘土混入 |
| 6 茶褐色土 | ローム粒少量 | 18 暗黄褐色土 | ローム粒多量、ロームブロック混入 |
| 7 黒褐色土 | ローム粒少量 | 19 黒褐色土 | 炭化物主体 |
| 8 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒少量 | 20 暗赤褐色土 | 炭化物・焼土主体 |
| 9 赤褐色土 | 焼土主体 | 21 赤褐色土 | 焼土多量、炭化物・粘土少量 |
| 10 暗黄褐色土 | ローム粒混入 | 22 暗黄褐色土 | 比熟したローム主体 |
| 11 黒褐色土 | ローム粒少量 | 23 灰褐色土 | 粘土主体 |
| 12 黒褐色土 | ローム粒少量、炭化物混入 | 24 暗黄褐色土 | ローム主体 |



第6図 第2号住居跡・第4・5・6号土壌(1)



第7図 第2号住居跡・第4・5・6号土壌（2）

状の崩れた形を呈する。口縁部周辺の横ナデ後、体部のヘラ削りを行っている。内・外面ともに煤が付着している。21は土師甕の底部で、出土位置がカマド周辺であること、胎土や内面のナデ調整の具合が20と近似する点から、おそらく同一個体と思われる。接合点がないので別個で掲載した。22は断面形が縦長の長方形になる鉄製環である。用途等は不明。

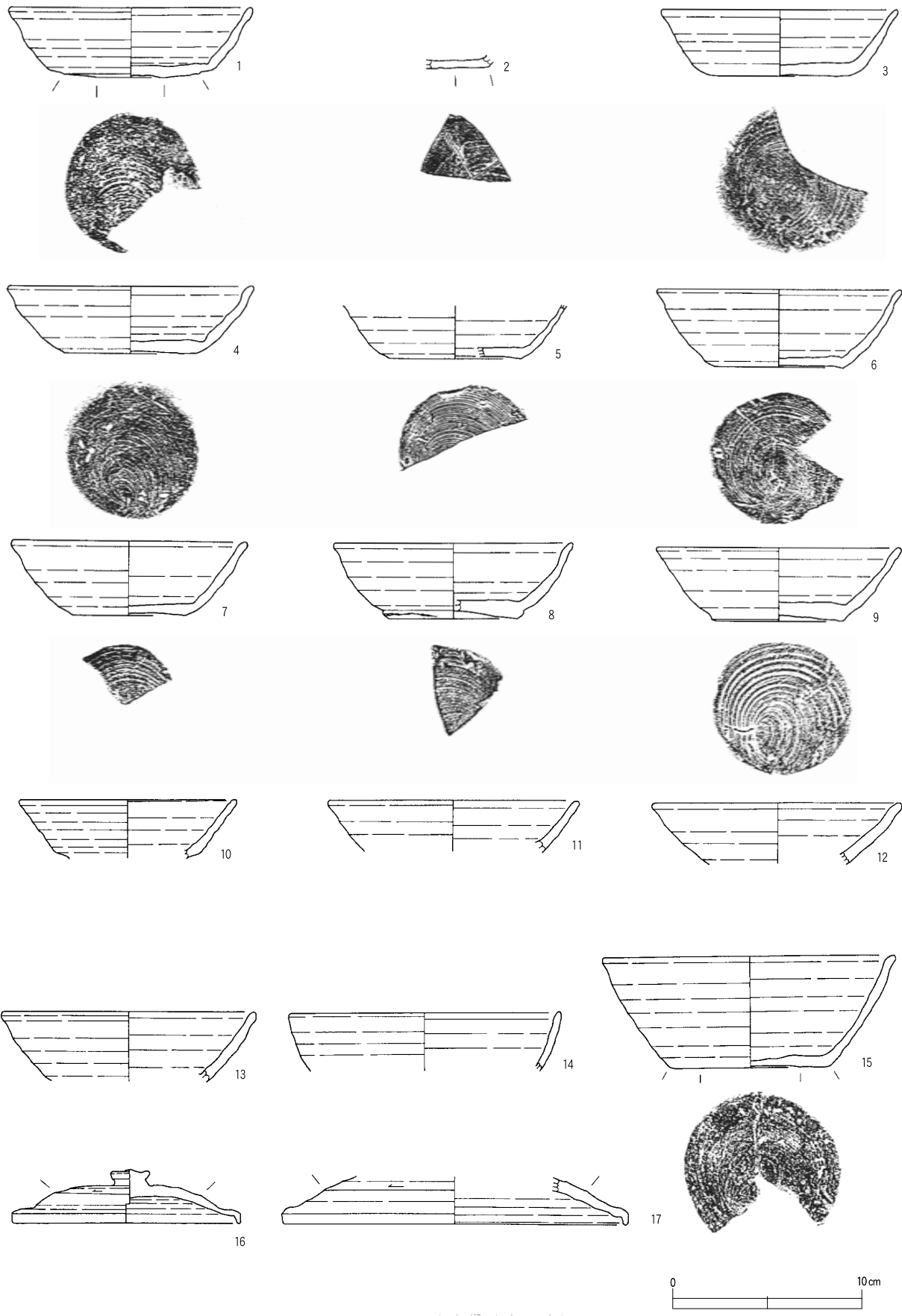
土壌

第4号土壌（第6・7・10図）

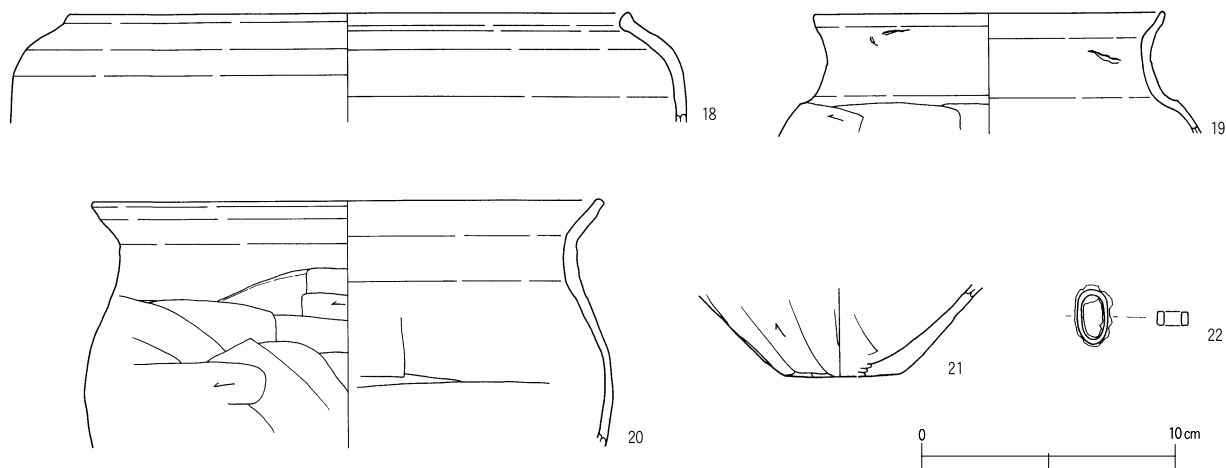
調査区北側に位置し、第2号住居跡と重複する。2号住居跡より新しい。掘り込みが浅く、遺存状態は不良。平面形は正方形を呈し、一辺が2.25m、深さは0.09mを測る。

第7から10層と24層の一部が本土壌の層で、土壌全体に広がる8・9層には焼土が含まれている。床面にも若干被熱した痕があるのが特徴的。

遺物は須恵坏・長頸瓶・皿が出土している。1は東金子産の須恵坏で、内外面に煤が付着している。灯明皿に転用された可能性がある。底部は回転糸切り、体部は直線的に立ち上がる。ロクロ目が細かいのも特徴。2は碗で、須恵器か灰釉陶器か迷う形で釉が付着している。釉の層自体は非常に薄く、ハケ塗りの感もあるが、破片が小さいため判断が難しい。口縁端部の「S」字屈曲が特徴的。3は須恵長頸瓶の体部下半から底部である。体部下半は丸みを帯び、ヘラ削りが高台の付け根より5.2cm上方まで施されている。内外面に釉状のものがまばらに付着しているが、内面のものは口縁部に付着した自然釉が滴下したもの、外面に付着した茶色がかった光沢部分は自然釉が付着したが、焼成焔を受けてこれが飛んだものと考えられる。胎土は緻密だが器面は粗く、全体的に重量感がある。高台部分は高く作られており、内側はややえぐる形である。また高台の貼付位置がかなり体部の下方にあるのも特徴的。



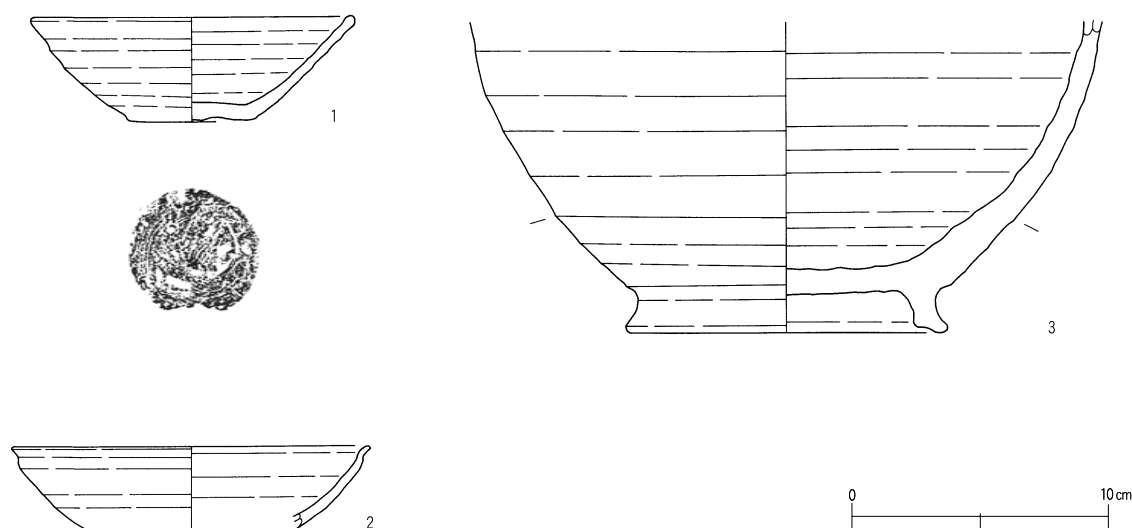
第8图 第2号住居跡出土遺物(1)



第9図 第2号住居跡出土遺物(2)

第2号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴	
1	須恵坏	(12.8)	7.2	3.7	35%	白色粒・細砂	不良	明褐色	回転糸切り 周辺手持ちヘラ削り。東金子産	
2	須恵坏	-	-	0.6	5%	白色針状	良好	灰色	周辺手持ちヘラ。ヘラ記号「×」。南比企産	
3	須恵坏	12.4	7.5	3.5	50%	石英・細砂	普通	黄灰色	回転糸切り。東金子産	
4	須恵坏	(12.8)	6.8	3.6	50%	白色粒・赤色粒	不良	明褐色	回転糸切り。東金子産	
5	須恵坏	-	7.0	2.8	45%	白色針状・石英	良好	灰色	回転糸切り。南比企産	
6	須恵坏	(12.8)	6.8	4.1	50%	白色粒・細砂	良好	暗灰色	回転糸切り。東金子産	
7	須恵坏	(12.2)	6.0	3.9	15%	白色粒・黒色粒	良好	青灰色	若干厚手。回転糸切り。東金子産	
8	須恵坏	(12.5)	(6.8)	4.0	20%	白色粒・細砂	不良	明灰色	回転糸切り。東金子産	
9	須恵坏	12.6	6.9	3.9	65%	白色粒	不良	明褐色	回転糸切り。東金子産	
10	須恵坏	11.4	-	3.1	20%	白色粒	良好	灰色	ロクロ目が細かい。東金子産	
11	須恵坏	(13.0)	-	2.7	10%	白色粒	良好	暗灰色	厚手。東金子産	
12	須恵坏	(13.0)	-	3.2	15%	赤色粒・細砂	不良	黄灰色	厚手。東金子産	
13	須恵坏	13.2	-	3.7	10%	白色粒・黒色粒	良好	青灰色	若干厚手。東金子産	
14	須恵高台付埴	(14.2)	-	3.1	20%	石英・細砂	良好	明灰色	口縁部があまり開かない。東金子産	
15	須恵埴	(15.4)	8.4	5.9	35%	白色粒・赤色粒	不良	黄灰色	回転糸切り。深型。東金子産	
16	須恵蓋	(11.8)	-	2.8	70%	石英・長石	良好	灰色	ボタン状ツマミ、口縁端部屈曲。東金子産	
17	須恵蓋	(18.0)	-	2.5	10%	石英・細砂	普通	明灰色	ツマミ欠損、口縁端部厚手。東金子産	
18	須恵鉄鉢	(22.0)	-	4.3	10%	黒色粒・細砂	良好	灰色	口縁端部は厚手で起立。東金子産	
19	土師台付甕	(13.6)	-	4.8	25%	石英・角閃石・細砂	良好	褐色	口縁部「コ」の字状崩れ。口縁上部<口縁下部	
20	土師甕	(20.0)	-	9.7	15%	白色粒・石英・角閃石	良好	暗褐色	口縁部「コ」の字状崩れ。口縁上部<口縁下部	
21	土師甕	-	(4.6)	3.5	20%	白色粒・赤色粒・角閃石	良好	黄褐色	底部のみ	
22	鉄製環	長さ 2.3 cm、幅 0.55 cm、厚さ 0.25 cm、重さ 3.6g								



第 10 図 第 4 号土壌出土遺物

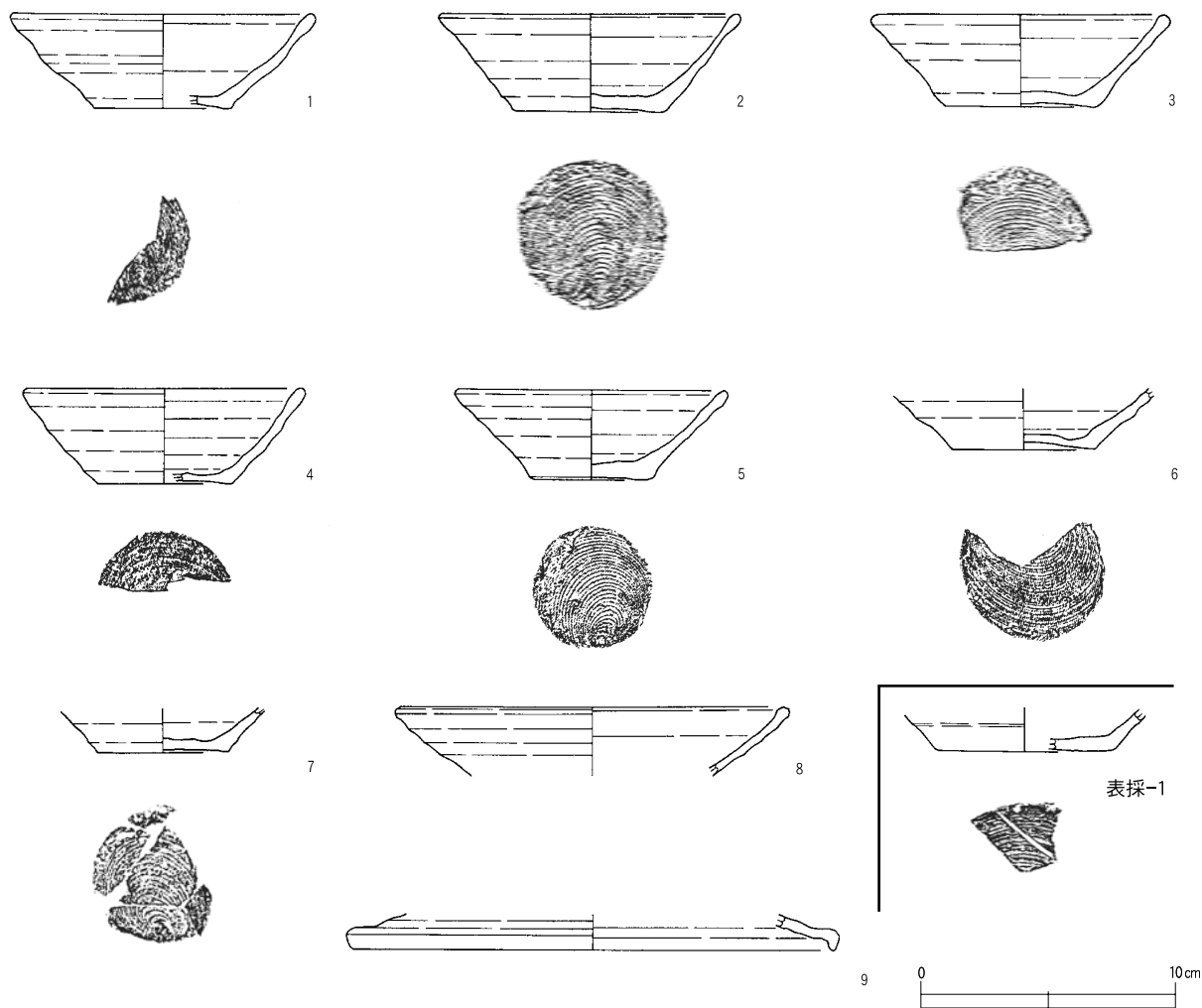
第 1 号土壌出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵坏	12.6	5.0	4.1	90%	白色粒・赤色粒・石英	不良	明褐色	回転糸切り。東金子系
2	須恵碗?	14.0	-	3.3	5%	黒色粒	普通	乳白色	口縁端部が薄い。ハケ塗り灰釉か?
3	須恵長頸瓶	-	12.4	12.3	40%	白色粒・黒色粒	良好	灰色	高台が高く、えぐりが弱い。東遠江産?

第 5 号土壌 (第 6・7・11 図)

調査区北側に位置し、第 2 号住居跡、第 6 号土壌と重複する。第 2 号住居跡より新しく、第 6 号住居跡より古い。壁体の遺存状態は不良で、遺構範囲がややぼやけた感がある。平面形は隅丸方形部分と、浅い正方形の複合形で、土層と遺物の出土状態から一つの土壌と考えた。全体の規模は長軸長 2.59m、短軸長 2.18m、深さ 0.70m を測る。第 4 から 6 層と 24 層が本土壌に該当。小規模な土壌ながら 9 点の遺物が出土した。

遺物は須恵坏・皿・蓋が出土している。1 は焼成が悪く、土師質の東金子系須恵坏である。口径が底径の 2 倍を越すのが特徴。体部は中間に弱い屈曲をもつ。口縁下部はつまんで薄く作られている。2 も東金子系の須恵坏で、直線的な立ち上がりの体部をもつ。口縁下部はつまんで薄く作られているが、1 ほど強いつまみ方ではない。3 も東金子系の須恵坏で、底部と体部の接合した痕と考えられるくびれがある。そのくびれ部分以外は直線的に立ち上がり、口縁下部にも細くつままれた痕はほとんど見られない。4 は若干湾曲する体部を持つ東金子系の須恵坏で、体部の断面形は 1 と 2 の中間くらい。口縁下部にも弱くつまんだ痕がある。5 は口径も底径も小さく、かわらけに近い形状の東金子系須恵坏である。底部と体部の接合点は厚手に作られた底部の脇にある。体部は直線的に立ち上がる。口縁端部の内面は平坦に作られているが、外面はやや盛り上がる形で丸みを帯びる。6 は須恵坏の底部片で、他の共伴する須恵坏の底部に比べて薄手である。底部中央部は内側に凹んだ形を呈し、内底部周辺に見られる強いナデ調整の痕が特徴。7 も東金子系の須恵坏底部片だが、酸化焰焼成であるため、もろい。体部の立ち上がりから、3 に近い形の坏であると考えられる。8 は東金子系須恵皿で、口縁部が若干玉縁状になり、端部は内面に面取りが施



第 11 図 第 5 号土壙出土遺物・表採遺物

第 2 号土壙出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵坏	(12.0)	5.6	3.8	25%	白色粒・赤色粒・細砂	普通	明褐色	回転糸切り。東金子系
2	須恵坏	(11.8)	5.9	3.9	40%	赤色粒・石英・細砂	不良	褐色	回転糸切り。東金子系
3	須恵坏	(11.2)	6.0	3.7	25%	赤色粒・石英・細砂	不良	黄灰色	回転糸切り。厚手。東金子系
4	須恵坏	(11.0)	5.4	3.8	10%	白色粒・石英	不良	黒色	回転糸切り。東金子系
5	須恵坏	(10.6)	5.0	3.6	35%	白色粒・赤色粒・細砂	普通	黄褐色	回転糸切り。東金子系
6	須恵坏	-	5.6	2.4	20%	白色粒・細砂	不良	明褐色	回転糸切り。東金子系
7	須恵坏	-	5.2	1.7	25%	白色粒・赤色粒・細砂	不良	黄灰色	回転糸切り。酸化焰焼成。東金子系
8	須恵皿	(15.2)	-	2.7	5%	白色粒・赤色粒・細砂	普通	明褐色	口縁端部厚手。酸化焰焼成。東金子系
9	須恵蓋	(19.0)	-	1.4	10%	白色針状・黒色粒	普通	明灰色	ツマミ欠損、口縁端部若干内屈。東金子産

表採遺物観察表


No.	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵坏	-	(7.0)	1.7	10%	白色針状・白色粒	普通	灰褐色	ヘラ記号の一部「-」東金子産

されている。9は須恵蓋の口縁端部の破片で、復元口径が19.0 cm程度の中型のもの。混入品の可能性が高い。

第6号土壇（第6・7図）

調査区北側に位置し、第5号土壇と重複する。第5号住居跡より新しいが、掘り込みはこれより浅い。壁体の遺存状態は良好で、第5号土壇の浅い正方形部分の壁体とは明らかに違う。平面形は隅丸方形で、全体の規模は長軸長1.67m、短軸長1.36m、深さ0.27mを測る。第1から3層と24層の一部が本土壇のもので、遺物は出土しなかった。

表探遺物（第11図）

10は東金子産の須恵坏底部片なのだが、ヘラ記号の一部「」が確認できたので掲載した。復元底径は7.0 cmで、今回出土した土器群の中では中型の坏となる。

まとめ





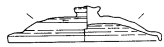

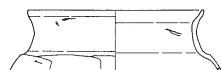
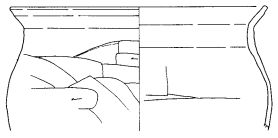


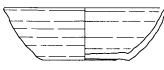



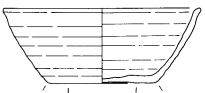


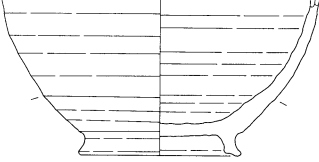







今回報告した遺構で検出されたものは大きく、第2号住居跡から検出された Ⅰ期（8世紀末～9世紀前半代）のもの、第1号住居と土壇群から検出された Ⅱ期（9世紀末～10世紀中頃）のものに分けられる。編年表は、小山ノ上遺跡（中村1998）、森ノ上遺跡（安井2005）、城ノ越遺跡第15次調査（安井2005）のものに沿う形で作成した。

Ⅰ期は第2号住居跡と第1号住居跡の混入品1点が該当する。

Ⅱ期は、第2号住居跡出土遺物の中でも年代に差が見られる。古い段階から見て行くと、8世紀中頃から後半の製品ではないかと考えられる周辺手持ちヘラ削りの東金子産、南比企産の須恵坏が各1点出土している（第2号住居跡出土1・2）。ただし、この段階の坏は出土量が少なく、これのために Ⅰ期に上げることは無理があるので、Ⅱ期に近い Ⅲ期の遺物として編年表には掲載した。次段階として体部中位～やや上位に、わずかな屈曲をもって内湾するような、森ノ上遺跡第18号住居跡出土1と近い形のもので4点（第2号住居跡出土4・6・8・9）確認できる。この中位屈曲タイプのもは概して底部が厚く作られており、酒井清治氏が「東金子窯跡群は浅い差し込みで、しかも差し込み位置のやや下で切るため底部が厚くなるとともに、体部下端に指を入れた段ができる」（酒井2002）とした9世紀前半代東金子産須恵坏の特徴を顕著に表す。第2号住居跡出土10・11・12は、中位屈曲タイプよりも少し新しい段階のもので考えられ、Ⅱ期ではなく Ⅲ期の混入品の可能性が高い。13については、体部は大きく外傾するが、口縁端部下位がややくびれるので上記のタイプのものより若干先行するものかもしれない。

Ⅳ期は、底部の周辺手持ちヘラ削り調整や、底径が口径の1/2以上で、口縁端部のゆるい「S」字状に外反する形状など、森ノ上遺跡第11号住居跡出土のものに近似する点が多く、ほぼ同時期の製品と考えられる。

Ⅴ期は、第2号住居跡出土16の小型蓋が、天井部中位までおよぶヘラ削りと、「L」字に屈曲する高くない口縁部が、小山ノ上遺跡第16号住居跡出土1の蓋に近似する。ヘラ削りの及ぶ範囲がこれよりやや広いと、限りなく Ⅲ期に近い性格を持つ Ⅳ期の蓋と考えた。中型蓋の第2号住居跡出土17は、天井部中

I 期	南比企産	東金子産	土師器	
II 期				
III 期	SJ2-2  SJ2-5 	SJ2-1  SJ2-3 	SJ2-16  SJ2-17 	SJ2-19  SJ2-20  SJ2-21 
	SJ1-4  SJ2-6 	SJ2-4  SJ2-8 	SJ2-14  SJ2-15 	SJ2-18 
IV 期				
V 期				
VI 期	SK4-1 	搬入須恵器 SK4-3  (東遠江産?)	灰釉陶器? SK4-2  (K-90?)	
VII 期	SK5-2  SK5-5 	SK5-8  SJ1-3 	SJ1-2  灰釉陶器 SJ1-5  (東濃産?)	

第 12 図 中原遺跡第 2 次調査編年表

位におよぶへら削りと、高くない「L」字型口縁端部など、16と同じ様相を呈する。天井部が欠損しているところが悔やまれる。

高台付塚の口縁は広がらず、体部はすぼまった立ち上がりを呈する。口縁端部内面の面取りが、霞川遺跡第1号住居跡出土の高台付塚に近いと考えた。

鉄鉢は口縁端部の立ち上がり、屈曲の弱い肩部が特徴。広町B灰原出土の鉄鉢にやや共通するところが多いが、東金子産である。

土師台付甕は、かなり「コ」の字状に近い「く」の字状の口縁部と、丸みを帯びると考えられる胴部が特徴的で、森ノ上遺跡第15号住居跡出土の台付甕の胴部と、森ノ上遺跡第13号住居跡出土台付甕の口縁部を併せ持つ、中間的な時期にあたるものと考えられる。

土師甕は、「く」の字から「コ」の字状口縁部への移行期と見られる形で、胴部の張りは肩部に近い上位にある。口縁端部は軽くつままれており、若干ではあるが薄くなっている。

期は第4号土壌が該当する。

坏は、器高がおよそ4.0cmと高くなり、底径は口径の1/2を下回るといふ不安定な形になる。体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部まで均一の厚さである。

塚は、搬入品の可能性が高いもの1点のみで、特殊なケースになる。胎土は緻密で硬質なものであり、薄く釉薬状のものが付着していることから、灰釉陶器の可能性も考えられる。口縁部の「S」字状の部分は端部が若干薄くなる点が特徴的。K-90号窯の施釉技術に近い。

長頸瓶は、高台の貼付位置が低い点、高台内側がえぐる点、胎土が締まっている点は同時期の東遠江産須恵長頸瓶の特徴と共通する。反対に異なる点は、東遠江産のものより高台の貼付位置が低いので高台貼付範囲の径が小さい点、高台自体の高さが高い点、胴部下位の丸みが強い点が挙げられる。胎土および共通点に挙げた3点から、搬入須恵器と判断した。

期は第1号住居跡と第5号土壌が該当する。

坏は、器高が4.0cm未満、口径は12.0cm以下が大勢を占めて小型化が進むが、底径と口径の比が再び1/2以上になる点が特徴。体部～口縁部まで直線的に立ち上がり、期までに見られた外反や湾曲はほとんど見られない。日高市の常木久保・稲荷・神明（中平2003）における期と期の間隙にあたる法量と形態と考える。

皿は、口縁端部は丸くふくらみ、内面を面取りされる。外反する口縁部を持つ9世紀後半の皿とは異なり、体部の立ち上がり方もやや急になっている。この器形から考えると、高台が付く可能性もある。

高台付塚は、口縁部が外反せず、内湾した体部をそのまま延長したラインを持つ。高台を棒状のもので押圧して貼付けた沈線と、高台の貼付位置が低いために高台貼付範囲の径が小さいことが特徴的。

塚は、第1号住居跡出土2が該当するが、地元で作られた土師質のもので非常に脆く、使用されているうちに削られて薄くなった可能性が高い。本来はもう少し器肉は厚かったものと考えられる。「S」字状口縁端部と、やや内湾気味の体部の立ち上がり、法量から見ると、灰釉陶器の模倣品の可能性もある。

灰釉陶器皿は、灰釉を漬け掛けしており、2度の漬け作業の痕が見られる。酸化焰で焼かれており、施釉部分は上手く発色せず、白くザラザラとした器面になっている。東美濃の大原2号窯の製品か。

参考文献

- 石塚和則 2001 『城ノ越遺跡第7次・8次調査』 狭山市埋蔵文化財調査報告第23集
- 石塚和則 1997 『城ノ越遺跡第9～11次調査』 狭山市埋蔵文化財調査報告第20集
- 石塚和則 2000 『宮ノ越遺跡第8次・城ノ越遺跡第12・13次調査』 狭山市埋蔵文化財調査報告第21集
- 今井正美他 1986 『狭山市埋蔵文化財調査報告書4 楊樞木遺跡』 狭山市文化財報告第12集
- 書上元博・金子直行 1996 『八木上ノ八木ノ八木前ノ上広瀬北ノ森坂北ノ森坂』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第165集
- 金子直行 2002 『八木崎遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第281集
- 小淵良樹他 1987 『狭山市埋蔵文化財調査報告書5 今宿遺跡』 狭山市文化財報告第12集
- 駒見和夫他 1982 『宮ノ越遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告第44集
- 酒井清治 2002 『古代関東の須恵器と瓦』 同成社
- 坂詰秀一 1984 『八坂前窯跡』 八坂前窯跡調査会・入間市教育委員会
- 坂詰秀一 1971 『考古学調査報告 武蔵新久窯跡』 雄山閣出版
- 高橋一夫他 1974 『前内出窯址発掘調査報告書』 埼玉県遺跡調査会報告第24集
- 富田和夫 2002 『熊野遺跡(A・C・D区)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集
- 中平 薫 2002 『常木久保・稲荷・神明』 日高市埋蔵文化財調査報告書第31集
- 中村倉司 1988 『小山ノ上遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第70集
- 仲山英樹他 1985 『狭山市埋蔵文化財調査報告書 城ノ越遺跡2・3次』 狭山市文化財報告
- 仲山英樹 1988 『古代集落遺跡出土の墨書土器』 『古代集落の諸問題』 玉口時雄先生古稀記念事業会
- 増田正博 1978 『城ノ越遺跡』 城ノ越遺跡調査会
- 安井智幸 2005 『森ノ上遺跡』 狭山市遺跡調査会報告書第14集
- 安井智幸 2005 『城ノ越遺跡第15次調査』 狭山市遺跡調査会報告書第15集
- 渡辺 一他 1988 『鳩山窯跡群』 鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一他 1990 『鳩山窯跡群』 鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会

報告書抄録

ふりがな	なかはらいせき							
書名	中原遺跡							
副書名	分譲住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	埼玉県狭山市遺跡調査会報告書							
シリーズ番号	第16集							
著者氏名	安井智幸							
編集機関	埼玉県狭山市遺跡調査会							
所在地	〒350 - 1380 埼玉県狭山市入間川1 - 23 - 5				TEL04 - 2953 - 1111			
発行年月日	西暦2005(平成17)年8月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	°			
なかはらいせき 中原遺跡	さいたまけんさやまし 埼玉県狭山市 さやま 狭山663	22	25	35° 51' 47"	139° 25' 42"	20040720 ~ 20040806	200	分譲住宅建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中原遺跡	集落跡	縄文時代 奈良・平安時代		竪穴住居跡 土壇	2軒 3基	須恵器 灰釉陶器 土師器		鉄鉢 搬入須恵長頸瓶 灰釉陶器碗

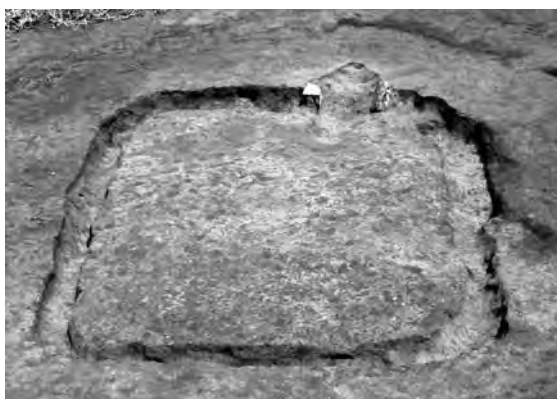
写 真 图 版



中原遺跡第2次調査区全景



中原遺跡第2次調査風景



第1号住居跡全景



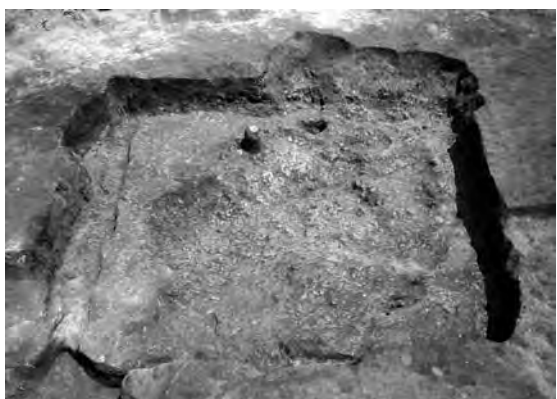
第1号住居跡カマド1



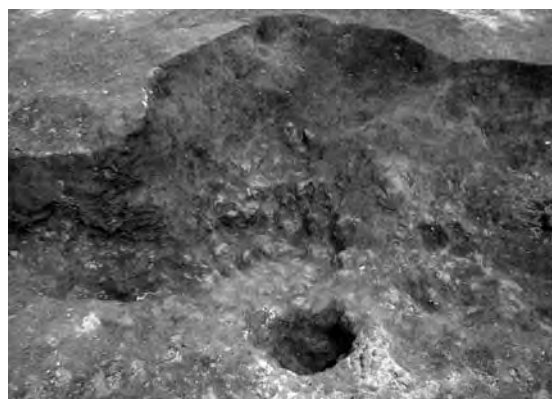
第1号住居跡カマド2



第1号住居跡カマド3



第2号住居跡全景



第2号住居跡カマド



第4号土壇



第5・6号土壇



第1号住居跡(第5图-1)



第1号住居跡(第5图-3)



第1号住居跡(第5图-4)



第1号住居跡(第5图-5)



第2号住居跡(第8图-1)



第2号住居跡(第8图-3)



第2号住居跡(第8图-4)



第2号住居跡(第8图-5)



第 2 号住居跡 (第 8 图 - 6)



第 2 号住居跡 (第 8 图 - 7)



第 2 号住居跡 (第 8 图 - 8)



第 2 号住居跡 (第 8 图 - 9)



第 2 号住居跡 (第 8 图 - 15)



第 2 号住居跡 (第 8 图 - 16)



第 2 号住居跡 (第 8 图 - 21)



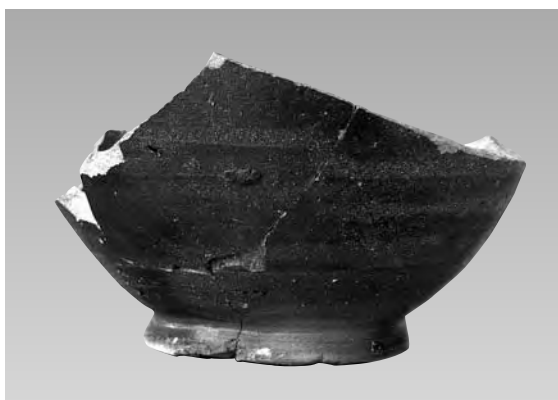
第 2 号住居跡 (第 8 图 - 22)



第4号土壙(第10图-1)



第4号土壙(第10图-2)



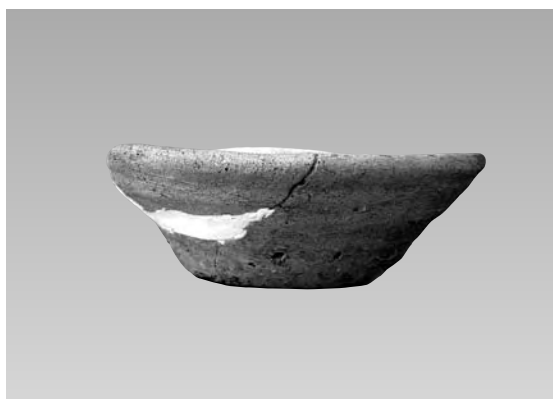
第4号土壙(第10图-3)



第5号土壙(第11图-1)



第5号土壙(第11图-2)



第5号土壙(第11图-3)



第5号土壙(第11图-4)



第5号土壙(第11图-5)

狭山市遺跡調査会報告書 第16集

中原遺跡
- 第2次調査 -

分譲住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成17年7月29日 印刷
平成17年8月1日 発行

発行 埼玉県狭山市遺跡調査会
埼玉県狭山市入間川1丁目23番5号
04-2953-1111

印刷 有限会社 ミネ五十子印刷

【正誤表】

中原遺跡第2次調査報告書

(狭山市遺跡調査会報告書 第16集)

ページ	行	誤	正
1ページ	中段表内 遺跡番号	22-025	22-038
5ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007
	48 上中原遺跡	22025	22039
	49 中原遺跡	22025	22038
8ページ	図版	SK1	SK4
		SK2	SK5
		SK3	SK6
12ページ	図版	SK1	SK4
		SK2	SK5
		SK3	SK6
22ページ	コード:遺跡番号	25	38